

シンポジウム「電子書籍の組版を考える 新たな組版ルールを求めて」文字の学校  
二〇一一年八月六日、東京・竹橋、ちよだプラットフォームスクウェア5F会議室

**和文組版の歴史に電子書籍は何をもたらすのか**  
技術が変わっても「新しいルール」などない、あるのは「新しい表現」である

前田年昭 [t-mae@inelabo.com](mailto:t-mae@inelabo.com)

電子書籍の登場ははたして和文組版にどのような変化をもたらすのであろうか。あるいは何が変わり、何が変わらないのだろうか。

### 「和文組版の基本ルール」は不変ではないが、変化はゆるやかなものである

文字組版とは文字を排列する技法である。

府川充男さんは、タイポグラフィは文字と組版システムと組版規則との、<sup>2</sup>すでにある出来合いの<sup>1</sup>“それぞれの組み合わせのなかにのみあり、それゆえ本質的に保守的だと指摘した。私

はかつて組版の変化は言葉の歴史的な生命力、創造力の現れであり、「ゆがみ」や「乱れ」としてでなく変動―定着―変動を繰り返していくさまをそのまま見つめることを強調し<sup>2</sup>、組版とは本来、動的なものである<sup>3</sup>”と述べた。

組版はたえざる変化のなかにある。伝統と革新、緩急の時間幅は、文字、組版システム、組版規則のそれぞれに別であって同一ではない。

和文の表記史を考えると、現在の漢字仮名交じり文を「完成されたもの」として固定的に見るのは歴史的な見方を欠く。中世までの漢字文、仮名文が、近世に候文としていったん定着し、近世末から近代にかけての句読点の発明に助けられて漢字仮名交じり文の現在に至っているのである。

(1)『組版原論』太田出版、1996年、pp.213-216 (2)「組版の哲学を考える」



(3)「組版とは本来、動的なものである」2010年



組版規則もまた JIS X 4051<sup>(4)</sup>をさまざまな条件を捨象して固定的な規範として理解するのは誤りである。4051自体、第一次規格（一九九三年）の左横書きのビジネス文書を対象とした本文十数頁の規格票から、第二次規格（一九九五年）で縦書き、ルビへ、第三次規格（二〇〇四年）でページ組版へ拡張され、対象は書籍とされて規格票も解説を含めて二〇〇頁をこえる大部となった。しかし、新聞組版をはじめ対象外の分野も少なくなく、4051の全面的機械的なあてはめは、ケーキを切るのにチェンソーを以てする愚に等しい。

結論を先取りしていえば、技術が変わったからといって「和文組版の基本ルール」は変わらない。不変固定という意味ではなく、変化が時間的にゆるやかなのである。「新たな組版ルールを求めて」も新しいルールなどない。いま、電子書籍とともに姿を現そうとしているのは「新しい表現」なのである。

### 電子書籍の特徴は頁と版面の溶解、文字サイズと字詰めの不確定にある

電子書籍の端末は、キンドルとKindleの登場までことごとく失敗の歴史だった。メーカーは端末を「作り手」の都合でこしらえ、協力を求められたほとんどの版元はホンネでは新しいことはしたくなかったからである。メーカーや印刷会社、流通、書店も巻き込んださまざまな合従連衡は、みな驚くほどに実体がない。紙と印刷に残るもよし、紙と印刷から離れた新たな表現を考えるもよし、今、必要なことはメリハリであり勇氣である。歴史の激動期にあつ



ては、「前例がない」との理由による新たな試みの否定は、坐して死を待つに等しい。ある哲学者は「失敗しない人は何もしていない人である」と述べている。

ここでアンドロイド上のビューワを比較検討してみよう(二〇一一年八月四日現在)。なお、本文やルビの文字サイズ、行間、余白などについてそれぞれに設定メニューが異なっており(これはこれでデフォルトはどうあるべきかという問題もあるのだが)、ここでの実例はあくまで一例として示したものであり、必ずしも個々のビューワの優劣を示すものではない<sup>(5)</sup>。

ビューワ(1)【実演1】は、ルビは肩付き(ただし親文字…ルビ文字が…の場合にはなぜか中付き)である。隣接する本文文字には文字クラスにかかわらず無制限にルビかけ、ルビ文字が長い場合は親文字をベタ組みを維持したまま肩付き規則を崩してまでひと連なりにしており、親文字とルビ文字との対応がわからなくなる場合がある。また、画面枠でルビが切れる場合もある。グループルビの親文字は分離分割禁止。結果、行末は数文字程度まで不揃いとなる。句読点のぶら下げなしだが、ルビは版面からはみ出す、無制限か。

ビューワ(2)【実演2】は、中付きルビ、ルビかけあり、親文字列はベタ組み。親文字列の長さにかかわらずルビ文字列領域は別個に連なり、長いルビ文字列が隣接する場合は親文字列との対応関係がまったくわからなくなっている。

ビューワ(3)【実演3】は、中付き、ルビかけなし。ルビ文字列が長いときは親文字列の文

(5) (1) i文庫 for Android (作者 ACCESS CO.,LTD.) (2) MHE Novel Viewer (作者 MHE Software) (3) A・文庫 (作者 titoi2) (4) 縦書きビューワ (作者 2SC1815) でいずれも Android Market で入手可。

字間隔を空けて調整している。分離分割を許容しているが、行末は不揃い。

ビューワ(4)【実演4】は、中付き、ルビかけあり。親文字列とルビ文字列との対応はわかりやすいが、親文字列のベタ組みを維持しているため、唯一、ルビ文字列が長いもの同士が隣接する場合にルビ文字同士が重なる場合がある。

ここから導き出される教訓は何か。一行三十数文字から約四十文字までの、紙の、書籍を対象にしたJIS X 4051のルビ組版の「ルール」をそのまま電子書籍にあてはめることはかなり難しいということである。電子書籍にあつては、文字サイズは本文もルビ文字も決め打ちはできず、字詰めも新聞組版並みの十数文字から約三十文字まで幅があるからである。決定には発信側(作り手)だけでなく受信側(読み手)も権限を持つ。そしてこれは電子書籍のよい面にもなりうる側面なのである。

日本の電子出版の先駆者であるポイジヤの萩野正昭さんが『OnDeck』二号(二〇一二年二月三日号)で、電子出版は「リフローするから(中略)組版ルールに依拠するのは間違い」と述べていることの意味を真剣に捉え考える必要があると私は考えている。

次に、活版から写植、さらに電算写植へと変わったときには、和文組版の「ルール」はどのように変わったのかをふり返っておきたい。

結論を先に述べれば、驚くほど変化はわずかだった。

機械的な折り返し改行による本文組版での決まりほぼ活版での決めごとを踏襲した。見出しやリードなど意味改行部分では、写植のレンズによる変形を生かした表現の幅が広がった。すなわち長体、平体、斜体が使われるようになった。また、カナ詰めや食い込み詰めなども登場した。技術の変化によって変わっていつているのは「表現」の部分だったのである。

### 「和文組版の基本ルール」は等間隔で刻まれる字送りと行送りのリズムにある

「新たな組版ルールを求めて」も新しいルールはない。そうではなくて「新しい表現」があるのである。世代をわたって無意識のなかに受け継がれてきた習慣の力としての和文組版の骨格とは何か。それは風、スタイルである。風とは何か。遠くから知人を見分ける際の風体であり、世阿弥『風姿花伝』の風姿でもある。

和文組版の基本的な姿は、文字のセンター・センターから次の文字のセンター・センターまで字送り方向に等幅で排列された文字列によって行が構成され、行の中心線から次行の中心線まで行送り方向に等幅でくり返される行によって版面が構成されることが基本である。行頭と行末のラインが揃って、なおかつ字送りと行送りがそれぞれ等幅でリズムを刻んでいくこと、ここに和文組版の風、スタイルがある。さまざまな調整を加えてもなお、調整の跡

を意識させない文字組版の設計と施工が、よい組版なのである。

「行長を文字サイズの整数倍に」という意見がある。ベタ組みの場合でいいのであろうが正確ではない。ベタ組みは字間を空けずに組むことであるが、本質的に定義すると、字送りを字幅（ここでいう字幅とは字送り方向の文字外枠の寸法であり、横書きでは文字の幅、縦書きでは文字の高さ）に等しくして組むことである。正しくは次の計算式が成立するように行長と字幅との関係を設定することである。

$$\text{行長} = \text{字幅} \times (\text{字数} + 1) + \text{字間}$$

「ジャステイファイに」という意見がある。両端揃えにし、段落最終行は左（上）揃えにと  
いうわけであるが正確ではない。12級字送り13歯20字詰めでは行長259歯である。しかし、  
ジャステイファイという指示だけだと21字入って余った7歯を20カ所の字間で割ることに  
なってしまう。文字のセンター・センターから次の文字のセンター・センターまでの字送り  
をとることを優先させなければならない。いまだに雑誌でしばしば段落最終行のみ詰まった  
みつともない組版が散見されるが、これはほとんどがInDesign登場までの「日本語DTPの  
失われた時代」にデファクトスタンダードであったQuarkXPressの「ジャステイファイ」に  
起因する。また、写真や図版の回り込み部分などでのパラッキも同様、正すには正確には均  
等な字送り値の維持にもとづかねばならない（ベタ組みとイコールではない）。

## 電子書籍の特徴をいかした新しい表現のなかに、伝統と革新との融合がある

私ははじめに、紙と印刷に残るもよし、紙と印刷から離れた新たな表現を考えるもよし、と述べた。紙と印刷の組版に徹するならリフロー型などに気を散らすことなく、PDFにすればいいのである。

紙と印刷から離れるなら、頁と版面の溶解をプラスに捉え直すことから始めたい。紙ではできなかった時間差表現を視覚単位に積極的に持ち込むことができるではないか。また、クリックや指のジェスチャによる別画面のポップなど版面に複数のフレームを持たせることもできるではないか。映像表現ではモーシヨン・タイポグラフィやキネティック・タイポグラフィと呼ばれるが、これもとりいれ、「新たな表現」として生かすことができる。

土台のルールは真摯に歴史から学び、表現では失敗をおそれず、いろんな工夫があつていい。この関係はけつして逆ではない。言葉（文字）が伝達と表現との二つの働きを持つているがゆえの関係だからである。土台のルールは歴史的な見方を欠いたルール破りを恣意的にやつてもダメである。他方、表現では先人に学んで大胆に試みていい。「失敗しない人は何もしない人である」のだから。

（おわり）